

三浦半島南部の生業と民具

宮本馨太郎*・小林浩子**

Livelihood and Folk Tools in the Southern Part of Miura Peninsula

Keitarō MIYAMOTO* and Hiroko KOBAYASHI**

(with 1 figure and 6 tables)

1. ま え が き

三浦半島を地形的にみると、付け根の部分の北帯と、大楠山・二子山など 200 m 級の山の並ぶ中帯と、50～60 m の台地からなる南帯とにわけられる。三浦市はこの南帯に属し、東西 6.8 km、南北 9.4 km、面積 30.68 km² あり、西海岸をほぼ両分する初声・三崎の両町と、東海岸一帯を占める南下浦町より成っている。

『新編相模国風土記稿』¹⁾に「当郡の風俗他に異なる事なし、山麓の村落は採漁を余業とし、海浜に在る者は漁撈を業とする者多し」とあるが、台地上に位置する三浦市では古くから農耕と漁撈が主な生産活動であったろう。

漁村としての三浦の習俗については、三崎の郷土史家内海延吉氏により克明に紹介され²⁾、また、おしょう流しなど特異な盆行事については、赤橋尚太郎氏がこれも詳細に報告されている³⁾。しかしながら現在の三浦市は、かつての活気ある漁村としての営みをよそに、近郊農村として、また観光地として大きな転換期をむかえている。今回はからずも、立教大学博物館学講座の実習としてこの地を調査できたことは、変貌著しい農・漁村の民具ならびに習俗を、幾分なりとも記録し留めておくといった点で、少からぬ意義があったものと思う。

調査にあたっては、三浦市役所、同出張所ならびに、浜田勘太氏ほか地元の方々から数々の御配慮・御協力を戴いた。誌上を借りて厚くお礼申し上げる。

なお、調査は以下の要領で行われた。

第1回調査

調査期間 昭和41年4月4日～10日

調査地 初声町三戸字神田・谷戸、南下浦町松輪字間口・池田、三崎町諸磯字浜諸磯

参加者 中川成夫教授、小林浩子副手、黒木治子、川上恵子、中山南、中村恭子、矢島芙美子、前田鏡、星野捷子、鈴木洋子、大橋靖子、白木和子、田中真悠美、松井征代、川口貴美子

第2回調査

調査期間 昭和41年7月22日～28日

調査地 南下浦町上宮田・同菊名・同金田

参加者 宮本馨太郎教授、岡本勇助教授、岸上興一郎嘱託、小林浩子副手、森田孝子、佐藤糸子、藤田紀子、堀部晴代、半田嬉子、塩崎晴朗、吉居恵子、酒井トミ、中村礼子、山口とき江、関口泰代

1) 大日本地誌大系編輯局編 『新編相模国風土記稿』 第5巻 巻之百七、三浦郡巻之一 雄山閣

2) 内海延吉 『海鳥のなげき』 いさな書房 昭和35

3) 赤橋尚太郎 『三戸のおしょう流し』 神奈川県民俗シリーズ3 神奈川県教育委員会 昭和39

*, ** 立教大学博物館学講座, St. Pauls University, Ikebukuro, Tokyo.

今回の調査は農具・漁具を中心とした在来の生産用具の記録・収集およびその調査を目的としており、それに関連する農・漁業の習俗を出来る限り記録することにより、三浦市の生業を有機的に把握せんとしたものである。調査には1部落に2日間の日程をあて、原則的には1日目に生産に関する聞き取り調査を行い、2日目に用具の記録・撮影・実測を行った。この調査にあたった学生の大部分ははじめての民俗調査であるため、階層的・地域的・時代的といった目的的な採集方法は行われず、もっぱら古い物置きを手あたり次第に物色するという方法を試みた。このため必ずしも意をつくした民具調査にはなり得ず、系統的な結果が得られなかった。ただ、現在という時点において残存する三浦市の生産用具の、ほぼ全容はつかみ得たのではないかと思う。

以下の報告は、学生のレポートを中心に、多少の加筆と修正を加え小林がまとめなおしたものである。誤解している点、聞き出し得なかった点など多々あることと思う。何とぞこれらの点につき御寛恕を願うとともに、大方の御叱声を戴ければ幸いである。

2. 調査地区の概観

三浦半島南端の東海岸部は金田の附近から景観を変える。すなわち久里浜千駄崎から続く弓形の砂浜は、金田岩浦を境に岩礁性の海岸に変わり、それは入江と断崖からなる松輪海岸へと移向する。調査地上宮田・菊名・金田・松輪の4部落はこの海岸線に沿って南北に並んでいる。初声町三戸ならびに三崎町諸磯は西海岸の臨海集落であり、三戸は西海岸では比較的なだらかな三戸海岸に、諸磯は典型的な岩礁性の海岸部に位置している。

このように調査地区はすべて沿海集落であり、台地上における畑作農業と、沿岸漁業が生産の母胎であることがまづうかがえよう。

前記風土記⁴⁾によれば、各部落は江戸からの行程各々18里で、上宮田・菊名には徒歩道・馬道の中継地があったという。昭和にはいり京浜急行が浦賀から三崎まで半島を縦断するバスを運行させたが、当時は1日の本数も少なく、部落の人々の交通は徒歩と荷車か海上輸送によっていた。それがここ10年程は東京・横須賀など近郊都市への通勤客・上級学校への進学者の増加などでバス連絡は急激に密になっている。また、東海岸は夏の海水浴場として近年脚光を浴びだし、昭和41年7月には京浜急行電鉄が上宮田に三浦海岸駅を設置するなど、近郊農村としての営みのほか、こういった面でも都会地との接触を強めている。

調査地区の人口動態は第1表のとおりである。

第1表 人口動態

年 度	上 宮 田		菊 名		金 田		松 輪		諸 磯		三 戸	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
明治5年	279	1,382	91	501	166	1,310	189	1,125	(9年) 114	601		
昭和35年	512	2,581	163	784	353	1,865	205	1,173				
昭和40年	569	2,634	204	868	399	1,942	(41年) 431	2,201	873	3,381	182	916

註：明治5年各村戸籍，および国勢調査統計資料より作成

3. 生業と民具

(1) 農業と農具

三浦半島南部は50~60mの海蝕台地で、古くから谷に田をその他の平地に畑を作ってきたが、

4) 1) の巻之百十一，巻之百十二

生産物は麦・サツマイモ・豆類・根菜類とわずかの自給用の米であった。それが戦後、スイカの栽培を始めその裏作にキャベツを作り、以前より栽培されていた三浦大根を加えた三輪作を基幹とする蔬菜栽培に変わった。これは、三浦地方が砂質壤土でもこれらの作物に適合であったことや、何より大消費地を近くに控えた地理的有利さに起因しているためであろう。

第2表は上宮田・三戸の耕地面積、第3表は上宮田の作付状況を示したものである。また第1図は三戸の生産暦をあらわしている。スイカ・キャベツ・大根が全作付面積の凡そ90%近くを占めていることと、輪換度の優れた作付状況が理解されよう。これは単に上宮田・三戸に限られる問題でなく、その規模に大小はあれ各部落に共通に見られる傾向である。

この商品農業化の傾向は農具の改廃状況を端的に物語っている。すなわち狭少な水田には使用できない耕耘機も、比較的面積の広い畑地なら十分導入できる。農具の機械化は畑作において、それも回転率の良い蔬菜栽培において急速に促進されたものといえる。

耕起具では、鋤・犁・マンガン・それらの付属品であるハモ・クラなど、今では無用の長物と化したものが多い。これらは昭和25～30年の間に完全に姿を消したと考えられる。マンノウグワ・ヒラグワなどは今日も使われているが、細部を耕す時にのみ用いられ、新しく買い求めるものは小型化していく傾向にあるという。施肥具・除草具の使用度も少ない。これは除草剤・化学肥料の進歩・普及のためであろう。運搬用具では天秤棒によるもの、背負板・背負籠などがあるが、農家に1～2台の小型トラックを所有する現今では、直接の生産活動に供しているとはいえない。

脱穀用具であるムギブチス(麦打台)は大正年間に広く使用されたものだが、このほか、踏み鋤・ツチカケキ・センブウキ・ワラスグリなど麦作に関係した農具は少なくない。このことは、三浦半島一帯に麦作がかなり広範囲に行われていたことを想起できよう。そしてそれゆえに、おしょうろ流しやおんべ焼きなど麦ワラを多量に使った行事が盛んであったこともうなづける⁵⁾。だが今日では、麦はスイカの風よけ、塩害よけの“囲い麦”として、栽培されているに過ぎない。

脱穀用具ではこのほかツチ・ヨコゴなど、足踏脱穀機以前の用具が今でも時たま使用されている。

調査地区の中では、三戸部落で比較的古い農具(ノミ=半鋤など)が残存し使われていた。これは、三戸はおしょうろ流しが部落共同体の行事として最後まで残った部落であるという赤橋尚太郎氏の報告⁶⁾に見るように、三戸の置かれた地理的位置のゆえであろうか。それにしても輸送路の整備された現今では、そのギャップも単なる昔がたりに過ぎなくなっている。三戸の農家は豊かである。

第2表 上宮田・三戸の耕地面積

	田	畑	樹園地
上宮田	32町8反8畝	126町9反3畝	48反9畝
三戸	34町1反2畝	87町0反9畝	

註: S. 41. 三浦市役所資料より作成

第3表 昭和41年度上宮田作付状況

	水稲	小麦	ばれいしょ	かんらん	だいこん	スイカ
作付面積	2,886畝	519	907	7,386	6,951	9,434
作付戸数	141戸	78	100	193	202	198

註: S41. 三浦市役所資料より作成

5) 赤橋尚太郎 三戸の「おしょうろ流し」横須賀市博物館研究報告(人文科学)5号 昭和36

6) 3)に同じ

農耕関係の民具

1. 耕 耨 具

耕耨具として挙げられる農具はスキおよび鋤である。スキは手鋤・犁の他、踏み鋤が使われた。

(1) テンチガエ (踏み鋤) (図版 I / 1)

テンチガエとかテンチガエシとか呼ばれる踏み鋤がある。これは鋤身とほぼ直角にとり付けられた踏み板に足をかけて土を起すもので、『農具便利論』⁷⁾に言う鑄鋤(いんぐわ、ふみ鋤ともいう)や、秩父郡大滝村のイグワ⁸⁾等のように鋤身(床板)自体に足をかける踏み鋤とは幾分形が異なる。全長 1 m 90 cm、柄の長さ 1 m 40 cm、鋤身の幅 15 cm・長さ 75 cm。刃は風呂型で、角のものと丸味を帯びた舟底形のものがある。深耕が可能だが大型のため非常に労力を要するので、男衆の耕起用具であるという。南下浦一帯では大正頃まで広く麦畑の耕起に用いた。なお、三戸で「丁字状の柄をつけたすこぶ状の農具で、荒おこしに使う」⁹⁾という「ふずき」は、テンチガエと同種のものと思われるが、フズキに踏み板が付いていたかどうか明らかでない。フズキは、いわゆる関東型の踏み鋤ともとれるが、そうであればテンチガエはフズキの改良されたものと考えられるがどうかであろうか。

(2) オンガン (犁)

前記踏み鋤は畑地の耕起具だが、水田には早くから畜力が導入され、これにはオンガンと呼ばれる犁が用いられた。調査したオンガンには大小 2 種類あり、大型のものは全長 2 m 40 cm、刃先より 1 m 30 cm の部分に牛馬にとりつけるための取手状の柄(1 m 50 cm)が約 45 度にまっすぐ付いている。小型のオンガンは全長 2 m、牛馬にとりつけるための柄は床板付近で幾分カーブしており、角度はやや広めである。後者は前者に比し木質が堅く、作りも精巧にできている。刃はどちらも風呂型で、長さ 23 cm、鑿床部の幅 17 cm である。オンガンは三戸では昭和 10 年代まで使われたが、舵のついた改良型は 7～8 年前まで使用されていたらしい。この舵つきの犁の刃は一枚刃のものが多いが、菊名でただ 1 点異った刃先をとり付けたオンガンを記録した。それは刃の長さ 55 cm、幅 26 cm、全体がゆるく内彎しており、刃先より 20 cm ほどは薄い一枚の鉄製の刃であるが、それはそのまま櫛状の 5 本の刃にかわっている。

(3) スキ (ノミ)

手鋤にはスキ(ノミ)がある。これは柄の長さ 2 m、柄の中程についている縄で身体に固定し、柄の先を肩に置き、スキを手前に引くような形で使用する。刃は風呂鋤で、鑿床部の長さ 32 cm、幅 18 cm である。昭和 20 年頃まで使用されたが、三戸神田の石田巧氏宅では現在も時たま使用している。初声町三戸では 2 点記録。

(4) マンガン (図版 I / 5)

碎土機であるマンガン(馬鋤)は牛馬にひかせ人が後押しする。材質は杉。高さ 65～70 cm、幅 1 m 内外、刃は 15～16 cm あり、三戸神田の石田長吉氏の話によれば、水田の時は鉄製、畑には竹製の刃をとり付けるといふから、田畑両方に使用したものらしい。

(5) ドッコイドッコイ

ドッコイともいう。オンガン、マンガンを牛馬にとり付ける棒。長さ 90 cm、両端の鎖は 1 m 70 cm ある。

(6) クワ・ヒラグワ (図版 I / 6)

7) 大蔵永常 『農具便利論』黄葉園 文政

8) 小川 徹 「埼玉県秩父郡大滝村における農業と農具」民族学年報 第 1 卷 三省堂

9) 赤橋尚太郎 「三浦半島民俗控帳(1)」横須賀博物館研究報告(人文科学) 2号

一般に見られる平鍬で田畑の耕起・畝作り・サクキリの際に用いる。耕起用のヒラグワは、刃幅 15~17 cm, 刃の長さ 36~40 cm, 柄は 1 m 内外であるが、サクキリ用のヒラグワは刃幅 8~14 cm, 刃の長さ 25~30 cm と鍬身は幾分小ぶりになる。用途によりナカグワ・ウナイグワ・サクリグワなどと呼ばれている。

(7) マンノウ (図版Ⅱノ6)

マンノウグワ・3本マンノウ・4本マンノウなどの名で呼ばれているこの農具は、3股ないし4股の備中鍬である。田畑の耕起用具としては最も利用度の高い鍬で、各農家ではサクキリ用・耕起・砕土用など大小あわせて4~5本は所持している。柄と鍬との角度はほぼ直角に近い。刃の長さは 25~32 cm で田の深耕用のマンノウは特に大型である。3本刃は古く、刃先が横にひとつながりのものは新しいという。これは一旦耕した土がすぐに鍬身より落ちないようにと工夫されたものらしい。サクキリ用の刃先は幾分丸味を帯びている。

鍬にはこの他、サライセというヒラグワの柄の近くに 4.5×9 cm の穴のあるものと、菊名でトーグワ (唐鍬) を各 1 点ずつ記録したにすぎず、種類は少いと言えよう。

2. 播種・植付用具

(8) ナラシ・サラエ (図版Ⅰノ3)

サラエ (サライ) あるいはナラシは田植前の整地や播種後、種子を平均に被うために用いる用具で、自家製の簡単な木製柄振である。これには 1 枚の板を適当な間隔に歯形に削っただけのものと、5 cm ほどの厚みの板に木くいを 5~10 本、等間隔に打ち込んだものがある。ナラス部分は 40~90 cm, 柄は 1 m 40 cm~1 m 80 cm で地面とほぼ水平についている。整地具としてのみならず、脱穀後の米・麦・豆類をむしろに拡げる際にも役立つ。三崎町諸磯ではクマダレとかクマザライとかいい、木くいの代りに釘を打ち込んだものもある。

(9) レイキ (図版Ⅰノ4)

鉄製柄振、整地具。幅 23~32 cm, 楯状の刃は 8 cm で 8~10 本ある。柄は自家製。

(10) コテ

蒔いた種子を土中に埋めるための自家製農具。舟底形で、長さ 40~50 cm, 幅 9~14 cm ある。材質は杉。柄は 1 m 50 cm で竹製。

(11) クワベラ

クワベラ・クワハタキ (浜諸磯・三戸) は長さ 18~20 cm の細い竹を斜めに切断しただけの簡単なものだが、鍬についた土をハタクには便利である。農作業に出る時は常時腰に付けておく。

(12) 張り縄・定規

張り縄は畝の間隔を測るため縄に等間隔の印糸をつけたもので自家製。定規は 2~3 cm 幅の薄い杉板を丁字形にあわせたもの。植付用具は調査不十分で他に資料はない。

(13) フルイ・ツチフルイ

直径 45 cm, 深さ 11 cm。土篩いに使用する。

3. 施肥具

(14) テオケ

注口肥料桶。口は竹製、他は杉・アスナロ材。サクに肥料をまく時に使用する。ヒジャクより均一に、かつ容易にまける。桶屋より購入。深さ 24~25 cm, 直径 23~30 cm, 口の部分は 35~36 cm ある。

(15) 肥料桶・ヒジャク (図版Ⅱノ5)

肥料を入れ、天秤でかつぎ畑に運ぶ。この時ヒシャクを併用。これは桶屋より購入する。

(16) フルミ (図版Ⅲノ5)

堆肥を作物に散布する際に使用する。縁は以前ワラであったが現在は竹。箕類は横須賀で購入することが多かったという。

(17) ツケダル

明治時代、肥料には人糞を用いたが、村内では不足して横須賀や東京まで買いに行ったという。ツケダルはこの時使用した肥料桶で 4~6 本を馬につけて運んだものらしい。

(18) フォーク

フォークは堆肥のきりかえの際使用する農具で、明治期より使用されている。金田ではツキマンノウ、三戸ではジュウノウと言っている。このフォークと同じ用途のものにマンノウの刃先の短いアワセマンノウ (三戸)・ドウイマンノウ (上宮田) がある。

4. 中耕・除草用具

中耕用具には前述のヒラグワ・マンノウグワ等のほか、次のような農具がある。

(19) サンカクグワ

スジキリグワ・サンカク (諸磯) ともいう。刃先が三角に尖っているため肥料を入れる際、作物の根を切らずに土を起すことができる利点がある。蒔き溝を切る時にも用いる。比較的新しい農具。

(20) ツチカケ

麦の播種後、土中の空気の流通を良くするため、サクの土を篩って種子にかける。この時使用する農具で、ツチカケ (諸磯・菊名・三戸)・ツチイレキ (諸磯)・ツチカケキ (上宮田)・ツブテコン (菊名) など、さまざまに呼ばれている。先端部の三角形の鉄の部分で土をすくい、網状またはすだれ状の部分で再び篩いおとす。戦時中に作られたものらしく昭和 24~25 年から数年間、直径 24 cm の歯車のある大型の手押しツチカケが出現したが (菊名)、利用価値は少なかったようだ。

(21) クサカキ (クサケズリガマ)

1 m 以上の柄のついた除草用具。南下浦では大正時代初めより使用された。

(22) ガンズメ

水田の除草用具。刃が鋭く内彎しているのが特徴的である。柄は 10 cm、彎曲した刃の部分 18 cm。

(23) テマンノウ

除草用の小型マンノウで、刃の長さ 8~10cm、幅 10~12 cm、柄の長さ 1 m 内外である。上宮田の長嶋若松氏宅では昭和 25 年頃まで使ったという。

(24) タウチグルマ

手押しの除草機。ガンズメの後、大正~昭和初期にかけて使われた。

(25) クサトリカゴ

除草の際刈った草を入れる籠で、これを傍に置いて除草を続けた。縦 44~46 cm、横幅 30~38 cm、深さ 15 cm。

(26) クサトリガマ

草刈鎌。

これらの除草具および 3 の施肥具は、最近除草剤の普及進歩でほとんど使用されなくなった。また新しく求める鎌は、小型化している傾向がある。

5. 収穫用具

(27) ノコギリガマ

稲、麦の刈り取りに使用する鎌。刃渡 21 cm, 柄の長さ 18 cm。(鎌にはこの他、木・竹伐切用の厚手のナタガマが見られる)。

(28) ツキノミ

ジネンジョ (自然薯)・ナガイモ掘りに使用する。作物の周囲の土に突きさし、くるくる回しながらまわりの土を柔らかくして物を掘り起す。柄は 1 m 50~60 cm, 刃は鉄製で長さ 18 cm, 幅 7.5~9.5 cm ある。『農具便利論』¹⁰⁾に見られる「ねぶかほり」や、都下旧南豊島郡で「自然薯掘」¹¹⁾、旧北豊島郡で「ごぼう掘」¹²⁾と称せられたものと同種類のものだが、これらは農耕具の中では最も原始的な掘棒の部類に属すると言われている。三戸神田部落で3点記録。

(29) ゴボウホリ

三戸神田の進藤家で記録したゴボウホリは、鉄製、長さ 1 m 40 cm, 先端が鉤状に曲っている。曲った部分 12 cm。掘棒の一種で、前記ツキノミと同様、ゴボウの周囲の土にさし、土を柔らかくする役目をするという。

6. 運搬用具

(30) ショイタ (背負梯子) (図版Ⅱノ2)

稲・麦の収穫後の運搬に用いた。全長 1 m 20 cm~1 m 50 cm。横幅 29~50 cm ある。杉材・麻縄のほか、シュロが使われている。古くは自家製であったが購入することもあった。

(31) ショイカゴ・ショイビク (図版Ⅱノ3)

ショイカゴは落葉など、比較的軽いものの運搬に用いる目の荒い籠、ショイビクは野菜・根菜類の運搬に使用する目の細かい背負籠である。両方とも直径 45 cm 内外、深さ 55 cm 内外である。また、ニジュウショイビクは内側の目の細かい籠をさらに竹の荒い目で被ったもので、ショイビクより一層丈夫である。茶菓子・農具等の運搬にも用いたという。

(32) カツギダワラ (図版Ⅱノ4)

堆肥・ジャガイモなどの運搬には俵が使われ、天秤でかついだ。金田で採集。

(33) デーワ (ダイワ)

「台枠」と思われる。天秤棒で物を運搬する際にこれに荷を乗せる。デーワは、縦 52~53 cm, 横 37~40 cm, 厚さ 10 cm の木の枠で、4隅あるいは2ヶ所に縄を付け、天秤棒につるす。自家製。

(34) ボテ

ボテは直径 52 cm, 深さ 10 cm。脱穀調整後の麦・米等を入れる運搬籠で、天秤棒でかつぐ。菊名の石井惣治氏宅では大正時代まで使用していたという。

7. 脱穀・調整用具

稲・麦の脱穀の初期には、カネセンバが用いられたというが残存していない。その他古い脱穀形式には麦打台を利用したものがある。

(35) ムギブチス (図版Ⅲノ1)

ムギブチス (ムギブチキ) は縦 2~3 m 50 cm, 幅 80 cm 内外の大型すのこ台の4隅に、60~80 cm の足をとり付けた脱穀用具である。台の下にはむしろを敷き、数人が台に向かって麦穂の束を打ちつけて穂を落す。海に近い部落では浜に出して行ったという。大正末期まで使われた。自家製。

(36) クルイ (連迦) (図版Ⅲノ2)

菊名ではクルイによる脱穀が昭和 10 年代まで行われていたらしい。回転棒は長さ 90 cm, 柄は

10) 7) に同じ

11), 12) 木下 忠 「弥生時代農耕具の伝統」物質文化第8号の掲載図より。

竹製で 1 m 70 cm ある。自家製。

(37) 足踏脱穀機 (図版Ⅲノ4)

カボチ (穂束) の脱穀に昭和 10 年頃から足踏脱穀機が使われた。これは足でペダルを踏むことにより刃のついたローラーを回転させ、ここに稲束をかざして脱穀するものである。使用年代は昭和 20 年頃までらしい。

(38) ヨコオ

ヨコオは穂から落した粃、枝を落した豆類などの殻を分離させる作業に使う。杉・松などを利用し、1 m 20~30 cm の柄に直径 10 cm 内外、横幅 30 cm 位のツチがついている。この腹でトンと叩いて殻をとるのだが昔から変らぬ調整用具である。自家製。

(39) ツチ

この他、前述の用途のほか、大根の種子を叩いたり、ワラを叩いたりするものにツチがある。直径 12~13 cm、長さ 16~20 cm ある。自家製。

(40) マメコキ

豆類を枝から落すのに使う。半截した竹と竹の間に豆の枝をはさみ手前にしごいて実を落す。

(41) センプウキ (図版Ⅲノ3)

ヨコオで実と殻を分離する際や、ミを利用してごみを除去する時、粃殻を飛ばすための手動扇風機。大正から昭和 20~25 年位まで盛んに使われた。

(42) センゴク・マンゴク

米の選別機。これらは今でも時々使われる。

(43) トウミ

脱穀後の麦・米の選別と前記扇風機の機能を兼ね備えたもの。昭和初期から使われだし、今でもまれに使用される。

(44) ミ

穀物を入れてごみをふるい落す。運搬にも使われる。

(45) トオシ (図版Ⅲノ7)

トオシには、コムギトオシ・アワトオシ・ヌカフルイなどがある。

(46) カラウス (土ウス) (図版Ⅲ, 6)

君島茂平氏宅 (菊名) で採集した。昭和 10 年頃から 20 年位まで使用されたらしい。直径 55 cm、高さ 50 cm、ヤリギという柄は、長さ 1 m 10 cm ある。

(47) タタラ (踏臼)

主食物の精製用具にタタラがある。タタラは土中に石臼を埋め、柄の部分を数人で足でふむ踏み臼である。菊名の小笠原得三氏宅では昭和の初期までこれで玄米を白米にしたという。

(48) 石臼

石臼は大正 10 年頃まで使用された。

(49) 木臼 (図版Ⅳノ1~3)

ウスは口径 (内径) 35 cm、高さ 49 cm、キネは長さ 46 cm、直径 10 cm 位の細長いもので、70 cm 位の柄がつく。またモチツキの仕上げにはケヤキ製のイチロク (直径 15 cm、長さ 50 cm、柄は 70 cm) を使う。

(2) 漁業と漁具

三浦半島の漁業形態は三崎の遠洋漁業を除き、その大部分は沿岸漁業である。これは 1 日行程程度の操業を母胎としているから、漁家は一方で農業を営む半農半漁の生活が一般的である。

たとえば、明治5年の壬申戸籍簿によって各部落の職業を検討してみると（南下浦4部落のみあり）、農業世帯がほとんどであり、漁業は農間渡世漁業としてあらわれているにすぎない。また菊名部落は全世帯91のうち漁家はわずか2戸、上宮田は当時279世帯であるが所有する船は45ソウと記されている。すなわち、明治初期の三浦の各部落はまだ農業集落であり、漁業はあくまで副次的なもの、それも細々とした沿岸漁業が行われていたものと思われる。

次に第4表は昭和25年の各部落の農・漁業別の世帯数を示したものである。比較的耕地を有する上宮田・三戸においては農家数は漁家の倍近い数を占めているが、他は農家・漁家の比がほとんど同数である。それが昭和35年の上宮田・菊名・金田の漁家数になると（昭和35年国勢調査結果より検討）、それぞれ全体の5%・11%・15%と比を大きく減じている。これらに、各部落での聴き取り調査の結果を加味し漁業の変遷をたどると、三浦市における漁業の全盛期は、大正から昭和20年位までのようである。したがって手元にある資料で、往時に一番近い昭和23～25年度の調査地区の漁業状況を若干ながめてみることにする¹³⁾。

第5表は各部落の各種の漁業依存度を表わしたものである。砂浜海岸に位置する上宮田・金田・

第4表 農・漁業別世帯数

	上 宮 田	金 田 菊 名	松 輪	諸 磯	初 声
漁 家 世 帯	126	178	182	50	267
農 業 世 帯	264	212	194	53	510
そ の 他	60	90	150	4	40
総 世 帯	450	480	426	107	817

註：昭和25年神奈川県水産課，漁業制度改革に関する資料より作成。金田菊名は同組合

第5表 部落別漁業状況表

	上 宮 田	金 田 菊 名	松 輪	諸 磯	初 声
沿 岸 漁 業		5%	37%	70%	40%
海 藻 採 取					
貝 類 "					
定 置 網 漁 業	22%	60%			20%
釣 漁 業		15%	39%		
そ の 他 沿 岸 漁 業	10%		9%	14%	10%
沖 合 漁 業	39%	10%			

第6表 漁業者状況表

	上 宮 田	金 田 菊 名	松 輪	諸 磯	初声(三戸)
船 主 ・ 経 営 者	2	8(2)			
網 組 (共同経営)	61	80		59(34)	70(50)
家 族 経 営	496	205(33)	487	59(34)	108(63)
加 工 業 者	14	11			
網 子 ・ 船 子 ・ 漁 夫	39	73(14)		26(21)	2(1)
魚 商	4				
そ の 他					1
計	616	377(49)	487	144(89)	181(114)

註：()内はそれぞれ、菊名・浜諸磯・三戸を示す。

13) 「漁業制度改革に関する資料(第1編)」神奈川県水産課 昭和25

菊名に多い網漁業，岩礁性海岸に臨む松輪・諸磯に多くみられる海藻採集，その両方を扱っている初声(三戸が含まれる)，さらに松輪の釣り漁業に注目される。そしてこれらは大方，家族中心の個人経営である(第6表)。したがって船主と船子，網主と網子といった封建的な隷属関係は稀薄であり，われわれの調査からも聴きだし得なかった。

ではこの年の各部落の漁業状況はどのようなものであったろうか。

・上 宮 田

海岸線 2km，全線砂浜であり遠浅をなしている。漁場は地先海面と東京湾，三崎沖，相模湾一円，専業者 19 人，第1種兼業者 50 人，第2種兼業者 48 人。

主な漁業と漁期

揚 繰 網 漁 業 (いわし)	周 年
地 曳 網 漁 業 (いわし・あじ・さば)	周 年
小 地 曳 網 漁 業 (しらす・あじ・いわし)	5~10 月
しらす地曳網漁業 (しらす・あじ・いわし)	5~10 月
手 繰 網 漁 業 (くるまえび・かれい)	5~6 月

・金田菊名

海岸線 4.5km，海岸の状況は岩浦より松輪に至る 2,500m が磯浜。菊名・金田地先間は蛭田鼻附近を除き平坦である。専業者が多い。漁場は金田湾一円，剣崎，松輪沖および東京湾，相模湾など。

主な漁業と漁期

手 繰 網 漁 業 (くるまえび・かれい)	5~7 月
視 突 漁 業 (かじめ・わかめ)	4~7 月
一 本 釣 漁 業 (すずき・さば・いか)	周 年
い な だ 建 網 (い nada)	2~11 月
す ず き 建 網 (すずき)	10~1 月

・松 輪

海岸線 5km，磯浜。磯根は沖合一带磯浜に続いて広がっている。ここにてんぐさ・わかめ・ひじき・はばのり・かじめ・さざえ・あわび・いせえびなどが棲息繁茂している。漁場は千駄崎沖合より城ヶ島沖合，江ノ島沖合，千葉県勝浦沖合より長井沖合など。専業者 62 名，第1種兼業者 83 名，専業者は一本釣，視突，裸もぐり，延縄等にたずさわる。

主な漁業と漁期

打 瀬 網 漁 業 (くるまえび・ひらめ)	4~10 月
一 本 釣 漁 業 (たい・ぶり・ひらめ・いか)	周 年
延 縄 漁 業 (たい・あまだい)	周 年
視 突 漁 業 (さざえ・あわび等)	周 年
採 藻 漁 業 (てんぐさ・わかめ・かじめ等)	2~10 月
磯 建 網 漁 業 (いせえび・はぎ)	8~4 月

・諸 磯

海岸線は 4.5km で油壺湾を除く全沿岸磯浜の岩礁地帯である。漁場は地先海面と小網代・二町谷附近。専業者は視突き，磯建網，採貝に従事，27名。第1種兼業が多い。

主な漁業と漁期

視 突 漁 業 (あわび・さざえ)	周 年
磯 建 網 漁 業 (いせえび)	周 年
い か 建 網 漁 業 (いか)	周 年

・初 声

海岸線 6 km, 三戸部落に砂浜があるほかほとんど磯浜。漁場は地先海面, 専門者はなく第 2 種兼業者が圧倒的に多い。

主な漁業と漁期

視 突 漁 業 (てんぐさ・わかめ)	9~12 月
地 曳 網 漁 業 (いわし)	周 年
磯 建 網 (いせえび)	周 年

以上の記述でわかるように, 三浦の漁具は視突き漁具, 磯物採集用具, 釣漁具, 網漁具にわけられる。今回の採集調査はかなり行きあたりばったりなものであったが, それでも松輪で釣漁具, 三戸・諸磯で磯物採取具, 上宮田・金田菊名で網漁具と, それぞれの地域性をあらかず漁具を採集でき, かつての各部落の漁法を知る上で少からず役立った。

漁具の変遷について一般に言えることは, 素材の改良, すなわち麻糸がナイロン糸に, 木材のアバがゴムに, 竹のアバリがプラスチックにといった目を擬らせば見出し得るような細部の変化, 改良である。それらは一時的に便利さを味あわせたかもしれない。しかしそれが生産を左右するまでに至ったかどうかは疑問である。このような漁具改良にみられる消極性は何に起因しているのだろうか。この問いのためには沿岸漁業の持つ停滞性を今一度考えてみる必要がある。山岡政喜氏は“沿岸漁業の技術が, 発展進化しないもの, あるいは進化してもごく緩慢なものとするなら, 停滞は沿岸漁業の属性である”と言っている¹⁴⁾。しかし技術より先に魚類の枯渇という生得的な問題がある。そこで沿岸漁業がだめなら漁業形態そのものの転換を待たねばならない。だが彼らに父子相伝の, 目と指の感覚できたえあげた在来の技術を捨て去ることができたであろうか, それよりここ当分その安定を保障されている近郊農業に徐々に転換する有利さを選んだものと思う。

三浦の漁業はある時期ぱっと花を咲かせはしたが常に農業の副次的な立場にたっていた。そして漁具は発展進化することなく古い形のままで残存している。あるいは古いままで枯ち廃ていくのではないだろうか。

漁業関係の民具

1. 漁 撈 用 具

磯物採取用具

これには貝類および海藻の採取具が含まれる。

(1) ブトカキ (図版 Vノ1, VIIノ1)

テングサ採取の鎌で長さ 5~6 cm の櫛状の歯を有する。大きさは 10 cm 程のものから 20 cm 位のものまである。これに竹や樫の柄を海の深さに応じて付ける。三浦ではテングサをブトグサと言うので, テングサカキ・クサカキ・ブトカキなどと言っている。

(2) ワカメガマ (図版 Vノ4ノ右)

ワカメ採取の鎌。L字型の鉄製の刃は 24 cm 程あり, この部分でワカメの根を切り, ワカメをひっかけて海上に掬い上げる。柄は深さによって継ぎ足していく (モトツキという)。ワカメキリ (松輪)・イソガマ (金田)・カマゾ (菊名)・カマド (金田・菊名) などとさまざまに呼ばれる。

(3) ガンガラ

ブトカキを大規模にしたものと考えれば良い。全長 1 m 20 cm 位, 幅 70~80 cm の木の枠に 15 cm の竹製の歯を櫛状に並べたものが 2 列付いている。これに石の錘りをくくりつけ, 先端の紐

14) 山岡政喜 「三浦半島の沿海集落」 人文地理 Vol. 11, No. 3. 沿岸漁業の停滞性と漁村の構造より 昭和 25

を船で引くことにより、海底のワカメが一度に多量に採取できるのである。テングサの豊富に取れた大正末期から昭和 20 年位まで使用された。

(4) カジメヒキ (図版Vノ3)

(3) に似た海藻採取具にカジメヒキがある。これは鉄製の細長い刃 (1 m 20 cm 位) の両端に船で引くための鉄の柄をつけ、刃にはとれたカジメを入れる網袋をかぶせたものである。(カジメ=アラメ)

(5) コゾウ (コゾ) (図版VIノ2)

コゾウはトコブシコゾウ (松輪)・トコブシトリ・コゾなどと呼ばれている。本来トコブシコゾウとはトコブシを取るための道具の名称であるが、アワビオコシ・イソガネなどもトコブシトリとかコゾウとか呼んでいるようだ。14~15 cm の短い柄を有するものは、ごく浅い岩場にいる貝類を取るであろう。比較的肉厚で、おこす部分が 4~5 cm のアワビオコシ (コゾウ) は、長い柄をつけてメガネを用い、舟べりから身を乗り出して取るという。

(6) 名称不詳の鎌

テングサをはやす鎌で、これで石をかくと、よく海藻が生育するという。

(7) サザエフシ (図版Vノ4ノ左)

サザエツキ・ヨツマタ (金田) などとも言いサザエを挟み取る道具。4 本または 3 本の金具を柄に末広がり縛りつけたものである。古くは自家製であったが、購入することもあったらしい。木や竹の柄は水の中で浮いてしまうので、以前は竹の中に砂を入れて防いだという。今は鉄製の柄もできている。

(8) ツイン

アワビをコゾウでオコシた後、これに吸いつけさせると貝を傷つけずに採取することができる。セメント製で、厚さ 3 cm、直径 20 の半円形。三戸谷戸部落、山崎清治氏宅で採集。

視突き漁具

舟べりから身を乗り出し、海中を裸眼、あるいはメガネをつけて覗き、海藻・魚貝類を鉈やその他の用具で採取する漁法をミツキ (視突き) といっている。したがって、磯物採取用具として述べたものも実は視突き漁具に含まれるのである。ここではフシ・メガネを紹介する。

(9) フシ (図版Vノ4ノ中、VIノ1)

フシ (ヤス) は、イケ (菊名) とかイカラ (金田) などと呼ぶカエシを有する 4 本または 3 本の鉈である。魚に突き刺さる部分は普通 13~15 cm 位のものが多いが、大きさによりチュウフシ・オオフシなどと呼ばれている。また突く魚によってはメバルフシ・ボラフシなどとも言われる。木の柄から、ブンドモリ (フンドンモリ) と言う長さ 1 m 内外、重さ 18 kg、中間部が三叉にわかれた鉄のものにかわってから漁獲高が上ったという。

(10) メガネ (図版Vノ5)

視突き漁法にメガネは必須である。これはサワラ・杉などの軟材でできており、高さ 35 cm、口径 25 cm、底径 32 cm の円筒状の箱眼鏡である。上面には木の棒と顔を支えるためのゴム (以前は布) がついている。この棒を口でくわえ、底のガラス越しに海中を覗るのである。メガネ・ノゾキ (南下浦)・カガミ (金田)・イソメガネ (金田)・ミツキなどと呼び名はさまざまだ。

(11) モリ

このモリは浜諸磯でただ 1 点採集したもので、1.7 cm 位の鉄製の鎌を竹の柄 (1 m 40 cm) に、中間にゴムを入れた紐でゆるみを持たせて縛りつけたものである。海中で、魚めがけてゴムを引くと、鎌が鉄の棒からはなれ、魚に突き刺る仕組である。

釣漁具

(12) アンドンビン (図版VIノ3)

銅線で編まれた餌入れ容器で、底に鉛の分銅をつけたもの。サバ・イサキのハネ釣の際使用する。この中にコマセを入れ、釣糸の先につけて海中に沈めるのだが、この時釣糸を少し振ると容器の中のコマセが海中に散り、これに魚が集って来る。今回採取したサバ用のビンは、高さ 11 cm, イサキ用は 8.7 cm ある。松輪間口の鈴木三吉氏宅にはこの鋳型（レンガを使用したもの）があった。なお、アンドンビンが使用される以前（15年位前）には、コマセブクロを釣糸につけたという。

(13) ビン

アンドンビン等とともに釣糸につける分銅。

(14) 擬似餌針各種 (図版VIノ4)

イカヅノ イカヅノにはヤリイカ用・マイカ用・夜イカ用などがあり、形が少し異っている。ヤリイカ用は長さ 13.5 cm の流線型で、バクダン（ツノの原型、鉛製）に赤と青、白と赤などの組み合わせで色糸が縞模様に巻いてある。マイカ用はヤリイカ用のツノよりやや太く、長さは 9.5 cm, 夜イカ用はさらに太く針は2段になっている。これらのツノはナイロン糸（以前は麻糸）に 1 m 間隔に連結する。

コンニャクヅリ コンニャクヅリはサバビンの先につけるもので2個を左右に、あるいは一本釣のハゴの先に 30 cm 位の間隔をもって3個並べることもある。赤・黄・橙などの印糸が付いている。

(15) ブリ専門のツリ

釣針のことをツリという。図VIの5はブリ釣の際使用したツリで、この尖った部分にイワシを刺したという。

(16) タコツリ

釣針のついた長さ 22 cm, 横幅 5 cm 位の木台の片側に石錘をつけたもので、これに餌をくくりつけて海に沈めた。図VIの5はその石錘で、長径 10 cm, 短径 8 cm ある。

(17) タコツボ

口径 15 cm, 底径 23 cm, 深さ 23~30 cm のタコツボは縄をつけていくつも海中に沈めておく。タコツボは諸磯では昭和 30 年位まで、金田では昭和 20 年位まで使用したというが、今ではブロック製のねずみ取り式のものにかわっている。

(18) ナワバチ

釣漁具にはこの他、延縄を入れるナワバチがある。松輪の鈴木正重氏の話によると、以前は自分でつくったが、今は大島から買うとのこと。

(19) スバル (図版VIIノ1)

切れた延縄を海中から引きあげるもの。昭和 20 年位まで使った。自家製。長さ 11.2 cm。

網 漁 具

(20) アバ (浮き) 各種 (図版VIIノ4・7)

アバは網の種類により、大きさ、形がさまざまである。図VIIの7は、エビ網のアバで、長さ 11.5 cm, うるし材にカッチンという防腐剤がほどこされている。これは 50 間の網に 11 寸間隔で付けるといふ。図VIIの4は地曳網のアバで、縦 24 cm, 幅 14 cm, 桐材である。また、図VIIの6は菊名で採集したカマス定置網の浮きで、直径 6 cm 程ある。

(21) イヤ

イヤは土錘である。イヤは長さ 4 cm ほどの土錘で、幅 3 尺, 50 間のエビ網のアシナとして 6 寸間隔に付ける。諸磯ではこれを千葉の瓦屋から購入するということだ。図VIIの5は地曳網のアシナワである。

いけす・水揚籠など

(22) タマ

魚を掬い上げる手網に2種類ある。ひとつは海から魚を掬い上げるもので、他は舟底の生簀から魚を掬い上げるものである。前者はオオタマ（大タマ）といい、口径 50 cm 内外、柄の長さは 80 cm～1 m 位であるが、後者（小タマ）は口径 20 cm 内外で柄も短くなっている。また、小タマは舟底から掬い易いように口の一部分が直線になっている。タマの材料は古くは綿糸を使ったが、今はクレモナ製が多い。

(23) スカリ

ハダカモグリの際、腰に付けてサザエなどを入れる網袋。自家製。

(24) イケスカゴ

長径 50 cm, 径短 11 cm, 深さ 11 cm の竹製生簀。

(25) ヨウバチ（魚鉢）（図版Ⅷノ1）

大正時代まで金田岩浦の岩野権蔵氏が使っていたという魚入れ容器で、長径 50 cm, 短径 40 cm, 深さ 15 cm ある。

(26) エビバコ

獲ったエビを入れる木製生簀。縦 75 cm, 横 40 cm, 深さ 20 cm で両側面は竹製で空気の流通を良くしている。昭和 10 年から 20 年代に使われた。また、竹で編まれたエビバコは、深さ 17 cm, 縦 55 cm, 横 30 cm あり、口縁部はワラで縁どりしてある。この方は、大正年間に使ったという。金田岩浦、岩野権蔵氏宅にて採集。

2. 船の付属品各種

(27) アカクミ（図版Ⅷノ2）

船内に入る水をかき出すもの。木製。縦 31 cm, 深さ 13 cm, 自家製。

(28) フナアンカ（図版Ⅷノ3）

大正 10 年から昭和 7 年頃まで使ったという。外側の木枠は自家製で、高さ 33 cm, 幅 31 cm ある。

(29) チゲバコ

釣道具などの小物を入れる自家製木箱。大きさは 30 cm×21 cm, 幅は 25 cm 位ある。

(30) ハコランプ・カーバイトランプ

大正時代に使われた船用照明具。高さ 35 cm, 幅 22 cm 四方あり、三方がガラスで、一面はベニヤが使われている。この中にロウソク（後に石油にかわる）を灯した。カーバイトランプの方は昭和 24～25 年まで使用した。

(31) トバ

船内で膝にかけるもので、チガヤと布が表と裏に使われている。縦 70 cm, 幅 1 m, 自家製。

(32) オハチとカタテ（図版Ⅷノ4）

カタテは直径 26.7 cm, 深さ 24 cm の杉製の桶で、船上で米をとぐのに使用した。オハチは直径 19 cm, 深さ 20 cm, 船上でゴハンやオカズを入れた。どちらも金田の深瀬八十郎氏が昭和 10 年頃まで使用したものである。

(33) 滑車

船の帆の上げ下しに昭和 20 年位まで使用した。

(34) イカリ各種（図版Ⅷノ5）

イカリには自家製のスナマイカリ（砂場碇）があり、木製でツメが 21 cm, ドウの部分は 25 cm

である。イワバイカリ(岩場碇)・スバルイカリは購入する。3資料とも現用品。図Ⅷの5は樗で作った木イカリ(イカラ)でクルマエビを捕獲する網に使用する。全長1m, ツメは40cmである。

3. 製作・修理具

(35) アバリ(網針)

網製作に用いる。竹製。近ごろではこれすらプラスチックに変わってきている。

(36) 網針筒

カラタケで製作した網針筒, 高さ20cm。

(37) オクフクバサミ・ホウチョウ

網製作に使用するハサミとホウチョウ。ハサミは浮きをつけて海中にほおり投げることもある。

(38) ギッチョ・オサ

縄を撚るもの。オサは杉材。ギッチョは自分で製作する。

(39) サシ

定置網のノボリ網を作る時使用する自家製の定規。

(40) イトグルマ

大正時代から昭和20年頃まで麻糸(釣糸・網糸に使用)を撚るために松輪の鈴木正重氏が作ったもの。輪の直径60cm, 高さは95cmである。

(41) 船大工用具

ツバノミはクギ穴をあけるための道具で, 50cmある。ツメキリンは船板相互を堅く継ぎ合わせる際に用いるもの。大きさは91cm。カクガシラは和船の飾り用の鋼の釘で, 長さ8cm, 頭の部分は長方形である。

4. 製造・加工用具

(42) ツツキ

コマセ(イワシを細かくくだいたもの)を作るのに使う。鉄の刃は長さ14cm, 刃渡り8cmで, 1m60cmの柄がついている。

(43) ホシズ

ヨシのすのこで縦1m, 幅60.5cm。以前イワシをこれに拵げた。

(44) ニアゲス

これは46cm四方の木枠に竹を大きめの格子に渡したもので, ここにイワシを並べ, 何段にも重ねて滑車で吊し, そのまま大釜でゆでたという。上宮田の須原重次郎氏宅で採集。

5. 儀礼具

(45) マイワイ

大漁を祈願して, あるいは大漁祝いに着る着物。金田の吉田徳蔵氏のもは, 千葉で染めてもらったという。昭和22年, イワシの漁獲高で優勝し県からもらった。

(46) ハンボ(ブ)

進水式などの祝いのある時に, この桶の底に杉の葉を敷き, 紅白のもちを入れ, 親類などが贈ったという。直径62cm, 深さ32cm。

(3) その他の生産用具

(1) 椿油搾り機

これは三戸神田の石田巧氏宅で採集記録した。この搾油機は椿の実から油をとるもので、石田市衛門氏（巧氏の父、明治10年生れ）が明治40年頃作ったものだという。材料には榎と椿を使用し、全長2m、総高82cm程ある。まず椿の実をツチで割り、ウスで粉状についてからこれをふかす。1番は10分、2番は25分位で2回行う。ふかした椿の実は黄褐色を帯びている。これをシュロの葉に丁寧に包み、搾り機の中程にとりつけられた箱形の容器にスダレをひいて入れ、ふたをする。これを上から圧縮すると油が搾れるのである。これは容器の上に長くのびた柄の先端を回転することにより行える。椿の実をついたもの2斗から約2升の油がとれるという。

(2) ロクロ

綿繰り器。回転する2本の棒の間に綿を挟み、ロクロを回転させると綿は前方に出てくるが、実は反対側に落ちる。このようにして実と綿を分離するのがロクロである。総高25~27cmで、38~40cmの膝おさえの板がついている。浜諸磯の出口初太郎氏宅では昭和10年~20年頃まで使用したという。

(3) ウマ（俵編み機）

俵を編む用具。ウマの横棒の上にワラをのせ、ハチニンコゾウ（浜諸磯）・コゾッコ（金田）・ヤッコサン（上宮田）・ツト（金田）などと呼ばれる木の錘りを両端につけた紐を4本、4ヶ所にくくりつけ、これを交互に動かすことにより俵が編める。ウマはヤマギリ・クワ・ヒノキなどの自然木を利用し、ツトは杉・サクラなどを直径5~6cm、高さ14~18cmに削ったものである。現在でも時たまオイ（寒い時）に使用するという。

(4) 草履作りの台

2点採集。ひとつは長さ60cm、今ひとつは85cm、高さ17.5cmである。材質は榎、自家製。

(5) むしろ編み機

大正初期~中期頃まで使われた。作業は2人で行い、1日1枚程度しか織れないという。ムシロバタロクロ・サンゴ（三戸）は1m内外、足台は総高1m23cmある。

(6) ハタヒ

菊名でハタヒを採集した。

4. 若干の聴き取り調査

(1) 上宮田の地曳網漁

漁場 上宮田沿岸附近にはスリバチ状の深みがある。それは震災以前には27ヒロあったが4尺ほど隆起したため、今では12~13ヒロしかない。ここをコブカリと呼んでいる。地曳網漁が盛んなころ、よく幾組ものアミがぶつかりあって争いを起すことがあった。そのためタテフネという仲裁の船が常に漁船の周囲についていた。このタテフネは三崎のものが多かった。

漁期 アジは6~8月、イワシは12~2月が漁期だが、昔はヨリ浜なので時期を問わずに出漁した。このため“下浦のアジは東京の相場を狂わせる”と言われた程、水揚げが多かった。半農半漁の家では農業は他人まかせでも、主人1人漁にできれば十分に生計が成りたっていたという。

漁撈組織 地曳網の操業は「アミ」という組織を作って行った。アミの数は最盛期には70組もあった。現在は7組でそれらはモトアミ・シゴエモンアミ・タカベアミ・キエエモンアミ・ドゼム（ドザエモン）アミ・イマイバラアミなどである。このアミにはいるためには、明治37年頃の相場で1人当たり30円支払い、仲買人にはある程度の敷金を払わせた。

漁の時は網船2杯を使用し、そこにさらに手船を魚の量に応じて付属させ、ナブラ（魚の進む方向）を前から囲むようにして操業した。1隻は見張り役の船で、この船は同時に他の船の指揮も行った。オキアイ（見張り役）は魚の群を見つけ船を誘導するので、目が良く経験豊かな者でなくて

はならなかった。見張り役はまたウケーとも呼ばれた。

一番最初に網を投げ入れた手船が魚を捕る権利を有し、その時は小板を振って他の船に知らせた。網が張られ魚を引き上げる時にはバンゴヤ（バンヤ＝番小屋）でほら貝を吹いた。

アミの当番はネンバン（年番）といい、毎年12月のシメイカンジョウの時に2人を選び、交代でその親方をつとめた。シメイカンジョウとは、その年のネンバンの家で1年間の清算勘定をすることである。残った収入は株の分により分配される。このように共同作業を行うようになったのは60年位前からで、それ以前にはアミモトが存在していた。

分け前 アミの中で見張り役をつとめる者は最大の報酬を得た。水揚げの分配は親方へ十分の三、残りを船頭・ヒキコが分配した。ヒキコ（網を引く者）には手すきのものなら仲間でもなれることができ、シロ（配当）もでた。そのうちわけは男はヒトシロ（一人前）、女はハンシロ（ハンニン）、子はハンシロのハンシロ（四分の一）であった。

船のこと 見張り役の船と網を張るための船の大きさ、重量は次のように異っている。

見張りの船	300貫	7尋(42尺)	幅4尺6~7寸
網船	800貫	7尋(42尺)	幅7尺5寸

造船のための材木は鹿野山・鹿島・香取からイカダを組んで運んだ。当時村には2~3名の船大工がいた。

網のこと アジとイワシの地曳網は別々のため、1組で2ジョウづつの網を所有していた。地曳網・巻網は購入したが、刺網は自家製であった。網は藤沢のカジノウという店屋から買った。地曳網の大きさは、長さ200間、丈が5間（5間1尺で）であった。

魚のこと 当時は陸にいても魚の群がやってくるのがわかった。その状態をアカミ・セリ・ハネ等と称していた。アカミとは魚が密集するとその附近の海の色が赤くなる状態を言ったものであり、ハネはボツン・ボツンと魚が跳ねる様子を表わしたものであるが、今では全く見られなくなった。また、“サカナヲヒイテイルトリ”ということをやったが、これは鳥が海上をぐるぐる廻っていて、突然海中に首を突っ込む時には、必ず魚の群がいたことを示している。この様子は“トリのニギワイ”ともいった。

(2) 金田岩浦の漁業

岩浦はもと30戸であったがインキョサンキョ（分家）で今は40戸。専業漁家は3戸、定置網・袋網・磯建網漁業を行っている。

昭和10年頃から定置網が盛んになりだしたがそれ以前はアグリ網漁が盛んだった。7~9月に東京湾までオオイワシ、コノシロをとりに行ったものだ。カタクチイワシ・スズキもよく獲れた。昭和8年前後はスズキの大漁で1日に2,000~3,000貫もとれたものだった。チュウバイワシの水揚げは昭和25~26年頃が最高潮であった。しかしこの10年、オオイワシ・チュウバイワシはおろか、アジ・タチ・タイ・イカもほとんどとれなくなった。

30年位前は様々の魚が躍ねている様子がみえたものだ。オオイワシの群などがやってくると、目の良い者が見つけてほら貝で畑にいる人に知らせた。また水が冷たくなる10月頃にはコチイワシのアカミ（魚の群）が月に2度ほどあらわれた。アカミの状態のことを“イロにナツテイル”ともいった。魚の群のいる海上をよく鳥が集り騒いでいることがあったが、金田ではこのことを“イニギワイ”といった。

網漁業には次のようなものがある。

イナダサシアミ イナダは刺網でとる。イナダは幼魚をワカシといい、ワカシ→イナダ→ハナジロ→ワラサ→ブリと成長の都度名前を変える。刺網の目はその魚に応じて大きくしていく。イナダは2寸目、ワラサが3.5寸目位である。ブリは9~10月が盛期である。

沖合ではタイ・サバ・スズキをとった。大きい網をダイゴウアミ、小さい網をチョコアミという。ダイゴウアミにはおとりのイタヅリ（板製のぶり）をつけて、タイをおびきよせた。一回の平均漁獲量は4斗ダルで1杯弱位であった。

巾着網 イワシ・ヒシコ（ヒコイワシ）をとる。

コザラン網 ウタセ漁業とかテグリ漁業とかいった。クルマエビ・コチ・ヒラメをとる。

三枚網 15年前から使われだした。魚の種類により大きさ、網目が異なる。クルマエビは9月1日が解禁で、網目1寸8分、高さ7尺位の三枚網で捕獲する。

磯漁業には次のようなものがある。

イソクサ（ワカメ）は2月25日が口あけで5月までとる。箱メガネで海中を見、カマで切り取る。深くなると木の元継ぎを足していく。1日にシガク（処理する）量だけ水揚げし、残りはスカリに入れ海に入れておく。現在はワカメの養殖が行われ機械ガマで刈っている。

ボトグサ（テングサ）は5月はじめから8月にかけて男がクマデで刈りとる。クマデはボトクサカキといい、5寸位の大きさを2寸5分位の爪が42本ついている。ボトグサは夜ザランした。

ヒジキは11～3月が採取期で、なかでも1月までのものが良質である。クチアケ（解禁）は特にない。

サザエは冬場のもので、昔はハダカモグリでとった。

定置網 10杯の船で網を張る大規模なもので漁期は2～7月。カタクチイワシ（カツオの餌になる）を主にとる。最盛期は昭和20年頃で当時20戸位が従事していた。現在は3戸になっている。乗組員には大正時代には舟をもっている金田の人がなったが、今は津軽地方の人が主に乗り込んでいる。乗組員は70名ほどいたが今は25名位である。

漁獲量の分け前は7割を網元、残り3割を船頭と水夫で1.5:1の割合で分配する。水夫のうちでも地元のは4分のシロワケにあずかり、地方出の水夫は3分と決っていた。シロワケは月の半ばに1回行われる。

定置網の保存には砂浜に拡げて干しておくのが一番である。船倉は三戸必要である。

（3）網 各 種

てぐり網 地曳網の原形、大型の伝馬船でテントウと呼ばれる船1隻に3名の漁師が乗り込んで沖合に網を張る。この網の大きさはハラが13ヒロ、フクロが10ヒロで、浮きにはテグレイワをつける。戦後伝馬船には動力をとりつけるようになった。ヒラメ・カレイ・アジ・クロダイ・スズキをとる。

しらす網 主にシラスをとるが他にシコウイワシなどの小魚にも用いる。網の後部にタフウアミという6ヒロの長さの袋がついているがこの網目は極めて細かい。最初前方の、人間の頭大もある網目の方でおびきよせ、次に袋の方に誘い込むのだ。網はシラスの色に合わせて白糸で編まれている。使用法は海岸から200～300m位離れた沖合へテントウで朝晩2回網を流し、2時間位たってから浜にいる30人位のひき子が網を引き上げる。

ささせ網 イナダをとる。長さ50ヒロの長方形の1枚の網で、これを海岸線に平行に5枚横に並べ海底に垂直に立てて張る。朝夕2回、1隻のテントウで張りにでる。三枚網はこれの改良されたもの。

コノシロ網（ハッサクアミ） コノシロを主に捕獲。船2隻を用い8人で行う。

マキ網 ボラを捕獲、船2隻でボラをとり囲むようにして行う。

その他 巾着網（マイワシ・シコウイワシ・コハダ・ボラ）・地曳網（メイタガレイ・クロダイ・タナゴ・ワタリガニ・アジ・サバ）・トリ網（アジ・サバ）・カニ網・ハダチ網などがある。

(4) 漁に関する禁忌・習俗など

上宮田

大漁の時にはマユワイと呼ばれるめでたい模様の描かれた着物を着用する。日当程度の収穫があった時は酒を飲み、それ以上の時はおそろいの手ぬぐいをかぶり、赤い帯をしめた。これをオキアカリといった。逆に不漁の場合には武山の不動様へ網船の旗印を持って参り、ゴマ札をもらってきた。

新しく船を造る時には、船大工がサイコロ1個と女の髪（船主の妻のものがよいという）と麻などをフナダマサマに入れた。新造船が進水する時にはオハライをし、船大工の家の真正面の方向にあたる海上を3回廻り、それから竜宮様の前の沖で再び3回廻る。この祝いの時にはシンゾウオロンといって、船大工を着服のまま海中にほおり込む。

海で死体があがると陸にあげ、浜でハマセガキといって経をあげ供養した。溺死体は男女逆の状態（女は仰向け、男はうつぶせ）で海面に浮かぶという。

お産があると、当分出漁が禁じられた。

金田

その家にお産があると10日～30日は漁に出ない。死亡者があった場合は7日間位禁漁。

漁師はよく3～4人で組になり、金比羅様、氏神様、大山様、伊勢神宮など、神様まいりをした。大漁の時はマユワイを着用し、赤飯を炊いて祝った。マユワイは材質は木綿、背と裾に模様のある祝儀用の着物である。

正月2日は浜でミカンをまいたり、酒を飲んだりする。個人ではノリゾメをする。正月11日はクラビラキといい、集って酒を飲む。

フナオロンの時はおもちをまく。また、船の上にサイコロを2つ並べ「とりかじぐっすり」「おもかじにっこり」ととなえる。これは荷物を満載し、皆の顔もにこにこしているとの意であるという。

船にフナダマサマがいるが、これは女の神様である。船に女性を乗せないのは船神様が嫉妬するからである。

流し樽の風習は余りない。

漁にでる時はお守りとして女の髪の毛を携帯する。

酔いのものを船に持ち込んではいけない。ス→スイは不漁を意味するから。

松輪

進水式には、以前はミカンをまいたり、新せきから祝儀としていくらかもらう程度であった。今は（27年前から）深い親せきからモチ1駄（丸モチ100コのはいったハンプを2桶）が送られる。その他の知り合いからはハタ・吹き流し・手ぬぐいをもらう。そしてホンゲンサマに船神様の前でお払いをしてもらう。モチは1斗7勺を赤と白につき、8シャクずつの丸モチにして200個つくる。これを杉葉で飾る。モチを海にまく時は手ぬぐいに包んだり、そのまま投げたりする。

口船の時代（50年前）には正月元旦に旗・吹き流しを浜に並べ、ミカン・手ぬぐいを海にまいた。この時代には大漁を知らせるのに鉢巻にしていた手ぬぐいをとって、大漁旗のかわりにしたという。

船神様には処女の髪とサイコロを船のへサキより入れる。

大漁祈願は春は2月25日、秋は11月26日にリュウグーサマに祈る。正月28日には武山の不動様に行く。

昔は不漁の時にもリュウグーサマにお酒をささげて漁のあることを祈った。このことから今では漁を休むことをリュウグーサマという。

エビスゼンとお膳の足のある方で食事をしてはいけない。船にミケネコのオスをのせるとよい、ミケネコは天気を教えてくれる。

正月 20 日に漁の神のエビス大黒に酒・魚を供える。

諸 磯

船神様には戦前は紙で作った人形の夫婦、今はコケン1対を舟のヘサキにまつる。またサイコロを2個、上の目を1、下を6（天一地六）に、とりかじ（左）を5に、おもかじ（右）を2にすることにより、上下、左右の目の数をそれぞれ7にそろえて船神様にそなえた。

三 戸

禁忌には、ミツキで鯉をとるな、船にネコを乗せるな、御飯に味噌汁をかけるな（災難に会う）、船中で肉を食べるなといい、またサル・ヘビなどの語を使うことを嫌った。

習俗にはマイワイ・マルナオンなどがある。マイワイは、オトヒメサマの絵のある着物の裾に「大漁」の字を書き、背に屋号を記した着物で、出船の際にこれを着用して宮参りをした。マルナオンは、不漁の時、景気づけに酒を飲むことである。

フネオロシ（新造船をおろす時）には、お宮の下の浜を3回廻って、「リュウグーサマ」・「カイジンナマ」と言いながら海に酒を注ぐ。

（5） 服 装

農業 男子は上にツツッポ（筒袖）、下はタモモヒキをはき、その上に三尺ハラガケをしめて野良に出た。頭は普通には手ぬぐいでホオカムリ、夏は自家製のミノガサを被った。また雨の日はタケノコガサを被った。女子は上にジュバン（オクミがなく、脇の下にマチがはいっている）を着用、これを膝までオハシヨリシ（ツイタケという）、下はタモモヒキをつけ、タスキをかけた。頭はホオカムリか冬はオコソ頭巾で、雨の日にはスゲ笠を被った。また、田では短かい前掛をした。足は男女ともハダシ足袋か地下足袋であった。

戦後は衣生活もかわり、男子は作業ズボンにジャンパーを着用、麦わら帽子をかぶり、女子はモンペとか野良ズボンにゴム足袋をはいている。

漁業 出漁の折りには、男衆は六尺フンドシをしめワラ製の前かけをかけた。冬は綿入れの腰切り（胴着）を着用、その上にワラミノをつけた。頭にはフランネル製のモウロクズキンをかぶり、雨の日にはタケノコガサをかぶった。足は夏冬ともに素足かワラジをはいた。

（6） 菊名の農業

昭和7年頃の稲作について述べてみよう。

タオコシ 田起しには木製のスキ（刃は鉄製）・四本マンノウを使用した。

シロキリ シロキリは土を細かくする作業のことで、土が柔らかければ3回でよかったが、一般にはまずジュジロといってマンノウで堅い土を細かくする作業を2回、柔らかくなった土をクワで耕すタジロを2回、計4回のシロキリを行った。

田植え 6月20日頃に田植をする。クワで深く耕し、マンノウで浅く起した。ナランでは肥料と土をよくまぜた。この時、フロバタといってクワでミズドメする。

田草取り 手で稲のまわりの草を取り、とった草は土の中に埋めた。播種後20日位で盆前となり、45日位で盆後にあたる。盆前に2回、盆後に1回、田草取りをした。この草取りのことをヒエヌキといった。

収穫 稲は11月中旬にノゴリガマで刈る。それらは東にしてカナコギでコイた。カナコギは横に何本も櫛状に並ぶ鉄製の歯をもち、稲束をあて手前にしごいて穂をおとしたものである。足踏脱穀機は片足のものから両足で踏むもの（ウメハラ式）、ペタルを踏むと回転するもの（ヤマリ式）へと変っていった。カナコギで稲をコカす時は籐製のミをあてがい、またコカした稲をむしろに拡げる時はナランを使用した。そのあとトウミで撰別した。

麦作 麦は11月下旬に種子を蒔き、5月上旬～下旬に収穫した。ヒラグワを用いて畑を起し、

三本マンノウ、またはレイキで畑をナラして種子を蒔いた。収穫した麦は、明治末期までは南京袋などにつめ浜に運び、ムギウチダイで脱穀した。落ちた麦の粒はヨコオでコブチして、粃と穀を撰別した。この時風を起してゴミや粃を飛ばすためにウチワ（1本の竹の周囲にウチワをとりつけたもの）やセンブウキが用いられた。前者は明治末期まで、後者は大正時代まで使われた。

肥料は戦前は人糞ばかりであったが、昭和7年頃には主に堆肥などが利用され、その他、過磷酸カリ・硫酸・マメイタ（豆かす）等が使われた。

水利は沼池を利用した。カケナガンとって水を上の田から除々に流した。塩害よけの工夫は特になかったという。

(7) 菊名の年中行事

1月

1日 門松をたてる。サカキとササの組み合わせのものと、松だけのものがある。3ケ日は野良仕事を休む。

7日 七草。

11日 オセネワリ（オソナエワリ）。オソナエを壊してシルコを作る。この日馬小屋を清掃する。休む。

15日 牛馬供養で仕事は休む。

15～16日 奉公人に暇間を与える。神棚に焼き餅を供える。

28日 武山の不動尊の祭日で休む。

2月

3日 豆まき。

初牛。奥越（オツコシ）講中、稲荷様に御馳走をする。2日間休む。

11日 稲荷講。小さなノボリをたてる。「ナベカケズ」といってよその家に行って食事をよばれる。

3月

3日 オコウシンサマ。五人囃しの人形の一つを海に流す。

23日 白山神社春祭り。お神楽がある。赤飯を炊きお宮参りをする。この日はノウメエシヨウガツ（農前正月）とかノウアガリシヨウガツ（農上り正月）といい、2～3日休んだ。

□日 地神講

5月

5日 節供。昼前に稲の種蒔きをしてから休む。

7月

7日 牛馬の供養。牛馬の墓に塔婆を立てお経をあげる。

15日 ミズマ神社の祭り。白山神社夏祭り。お神楽がでる。ミズマ様は田の神である。また、虫よけの神でもある。

8月

1日 ムシオクリ（虫送り）。田の稲に悪い虫がつくと、1軒1軒神主が竹籠をもって苗を集めにまわった。虫のついた苗を籠に入れ、夕方、おはらいをしてから子供達が海に流す。この時、歯の悪い人も何かをくわえてそれを籠の中に入れた。虫送りの風習は明治の終りごろまで行われていた。

14～16日 お盆。

9月

□日 地神講。

10月

23日 白山神社の秋祭り。収穫祭。1年中で1番賑やかな行事。アメヤオドリという刈り入れを祝う踊りがみられる。

12月

1日 星まつり。年まつり。夜半、神主がお払いをする。大正12年頃の相場では、1人10~20銭位がお払いにかかったという。

5. あとがき

古い農具の消滅状態は、海の影響の強い自給自足の半農半漁村から、商業化した農村への転向を端的に語ってくれる。そして一方、沿岸漁業の不振とその属性のため、古いままの姿で残存しようとしている漁具にも時代の流れは容赦なく訪れ、今やそれすら消えようとしている。

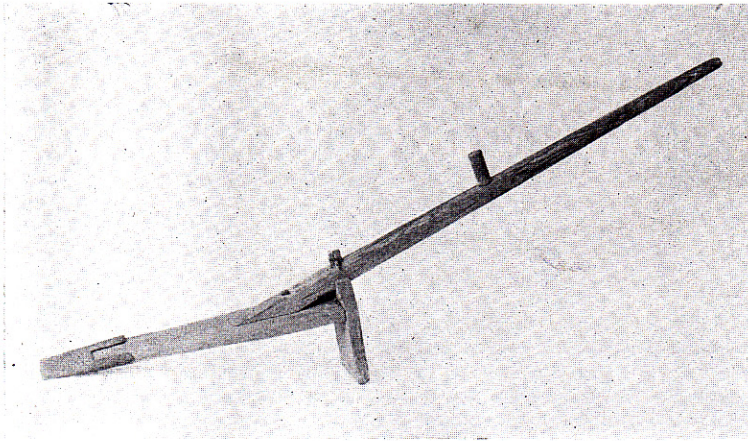
集落の発展には必ず長い年月にわたる幾人かの人達の努力が隠されている。三浦の農・漁具の収集調査を、より系列的に行うことにより、これらのことがさらに詳しく浮きぼりされることだろう。

以上、三浦半島南部の生産用具と、それに関連する漁村の習俗などのごく概略を、諸節にわたり記してきた。“民具は、同一種類の民具が多く集められたり、階層的に地域的に、あるいは時代的に比較研究のできる系列的な採集が行われた時とか、あるいは個々の民具がひとつの生活系列において有機的・総合的に採集された場合、高い価値をもつ”¹⁵⁾。このたびの調査はそのどれにもほど遠いといえよう。今後さらに検討をくわえてゆくつもりである。

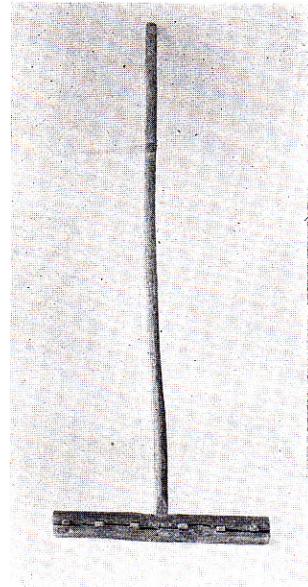
15) 磯貝 勇 「生産に関する道具・運搬具」 郷土研究講座 第4巻 生業 角川書店 昭和33

図版 I

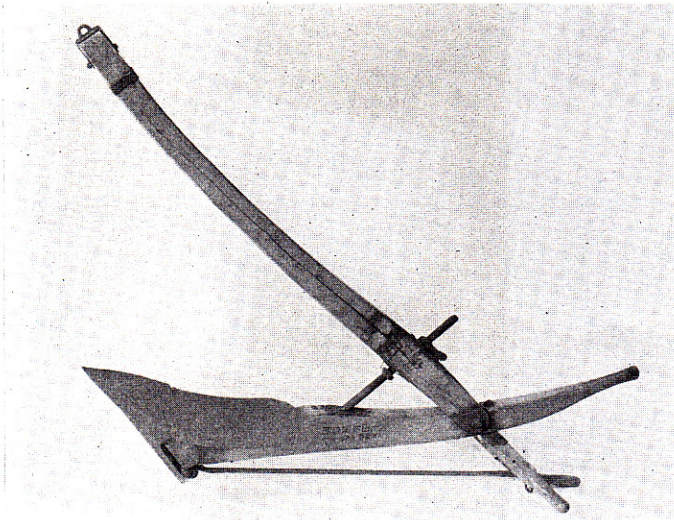
農具 (1)



1. テンチガエ (上宮田)



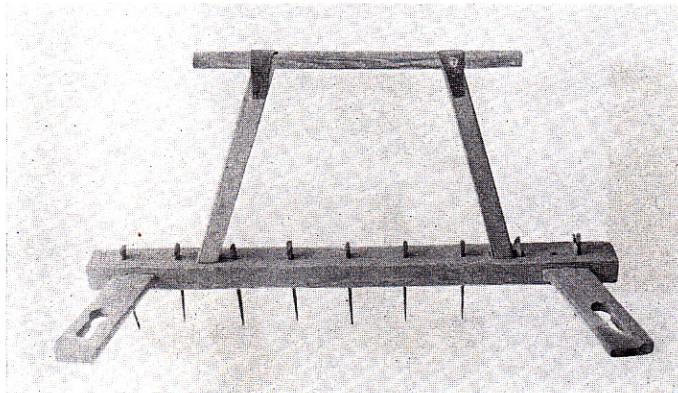
3. ナラシ (菊名)



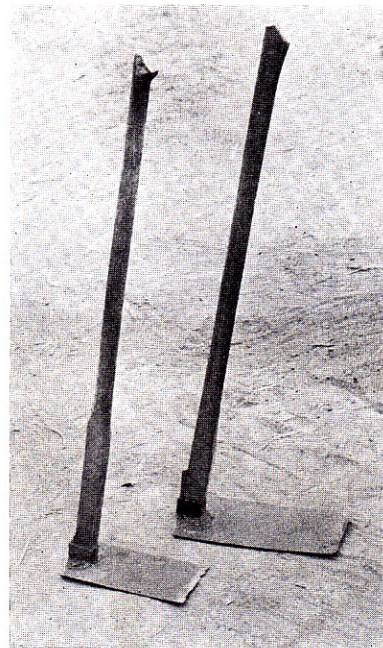
2. スキ (三戸)



4. レイキ (金田)



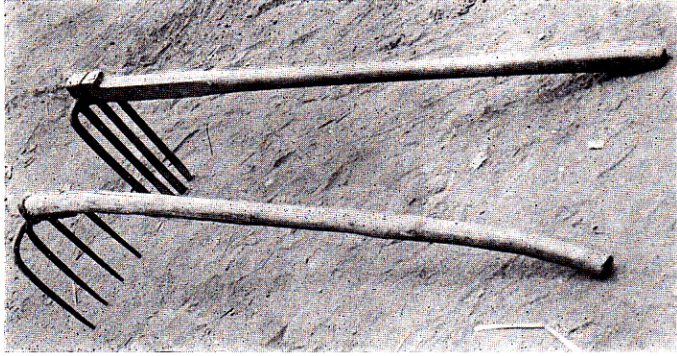
5. マンガン (上宮田)



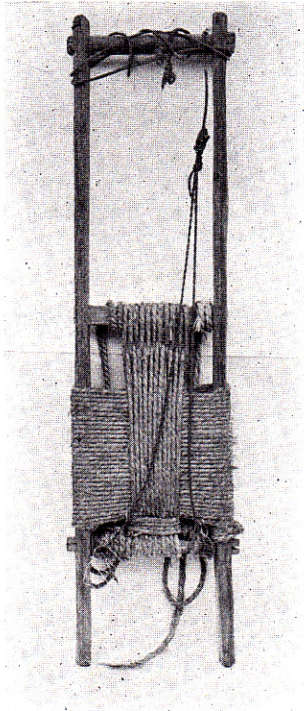
6. サクリグワ (菊名)

図版Ⅱ

農具(2)



1. マンノウ (金田)



2. ショイタ (金田)



3. ショイビク (菊名)



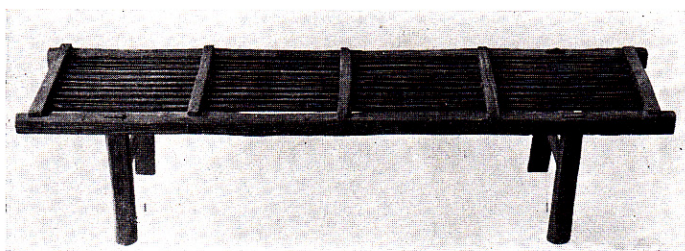
4. カツギダワラ (金田)



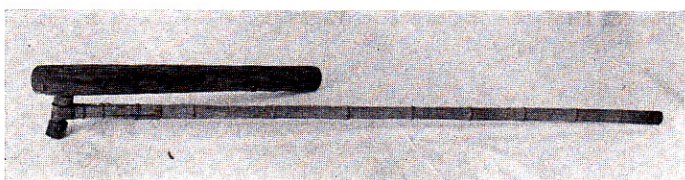
5. ニナイ (上宮田)

図版Ⅲ

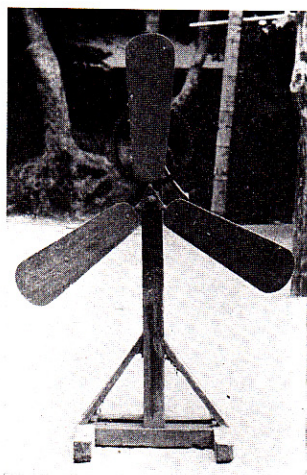
農具(3)



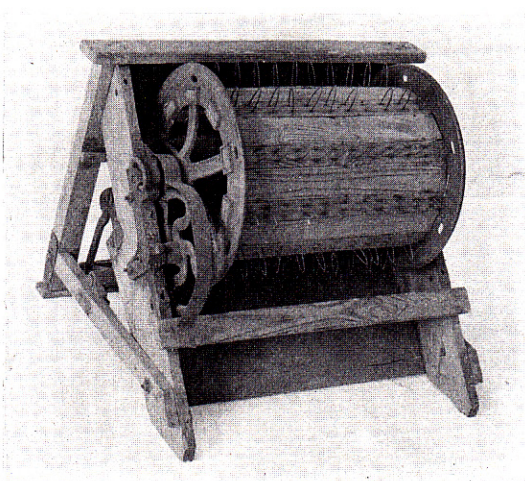
1. ムギブチス (菊名)



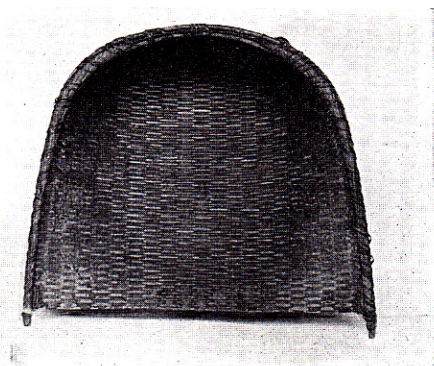
2. クルイ (菊名)



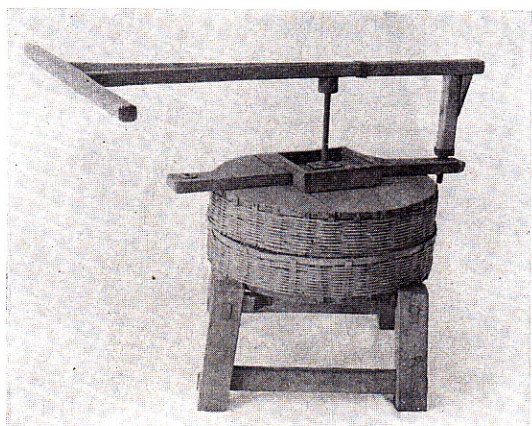
3. センブウキ (三戸)



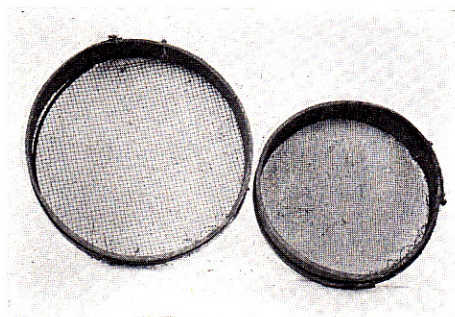
4. アシフミダッコクキ (松輪)



5. フルミ (上宮田)



6. カラウス (菊名)



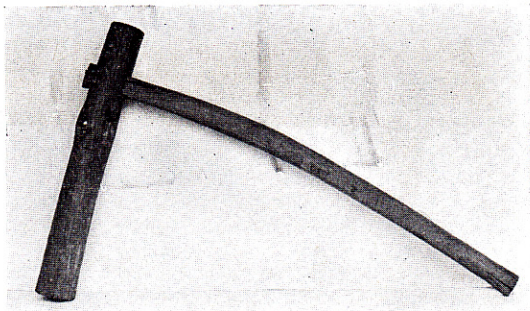
7. アウトウシ (金田)

図版 IV

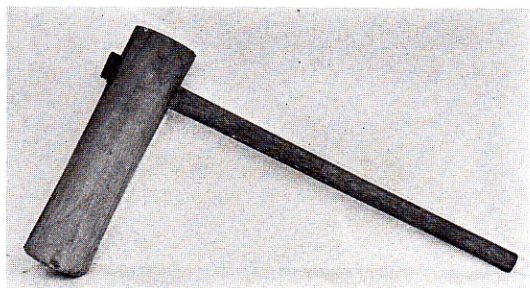
農 具 (4)



1. キネとキウス (金田)



2. キネ (金田)



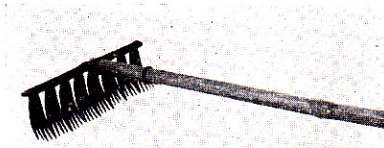
3. キネ (金田)



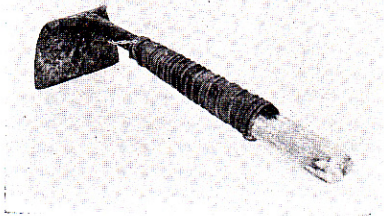
4. ミノ (三戸)

図版 V

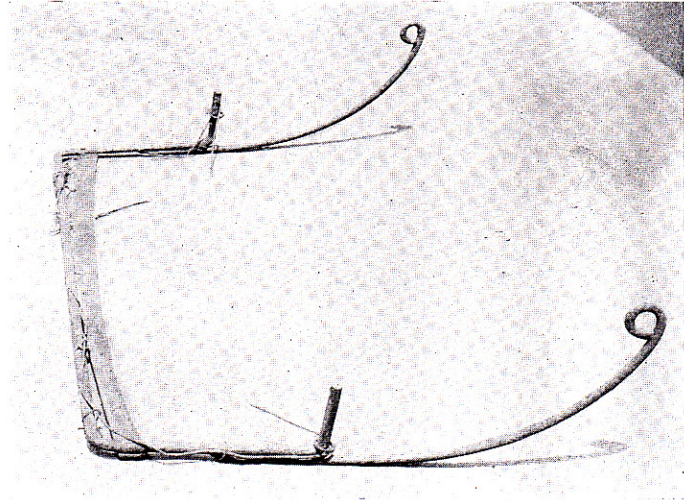
漁 具 (1)



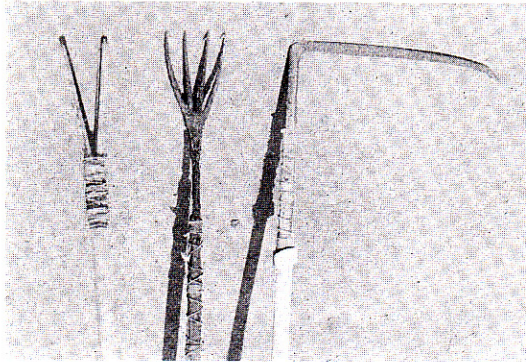
1. ブトカキ (菊名)



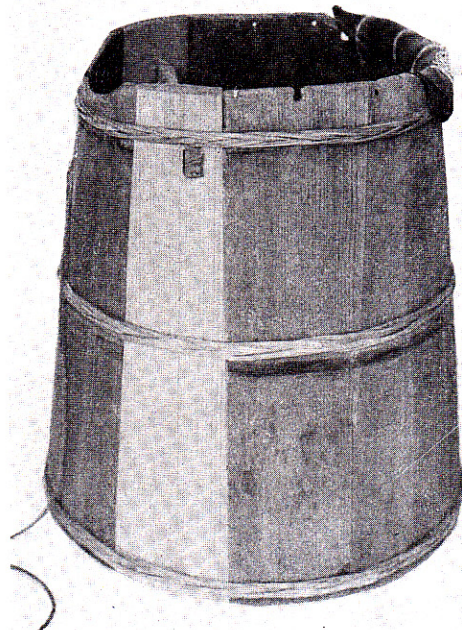
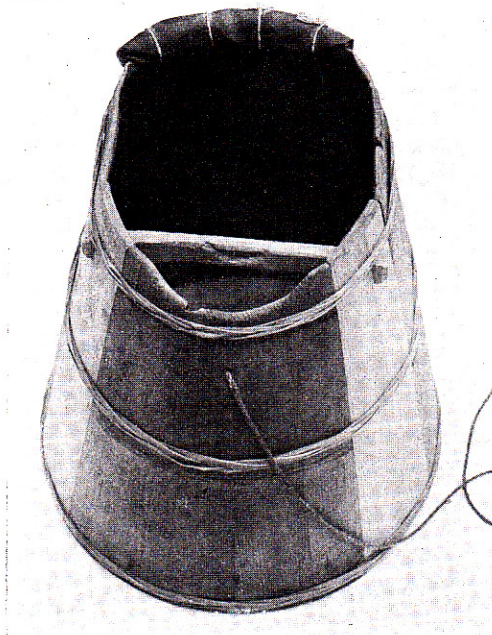
2. カキ (金田)



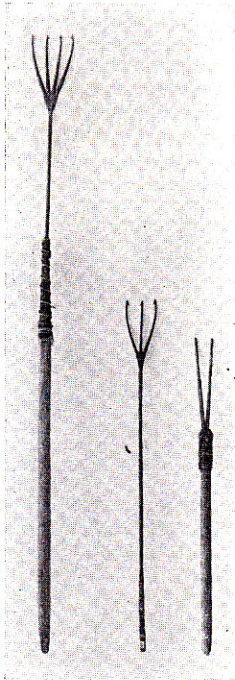
3. カジメヒキ (上宮田)



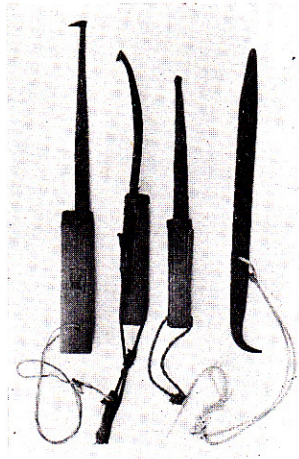
4. サザエツキ (上宮田), モリ (金田), カマド (金田)



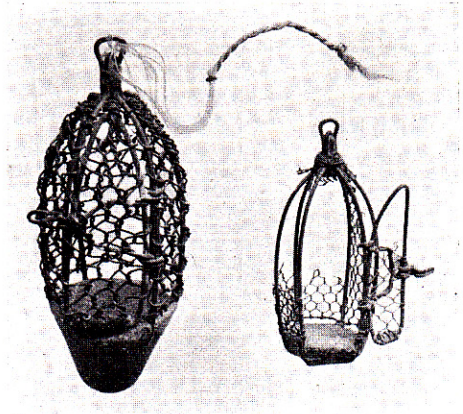
5. ハコメガネ (金田)



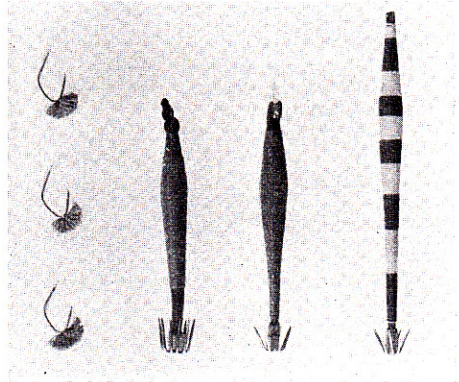
1. フ シ (松 輪)
フ シ (浜諸磯)
サザエフシ (浜諸磯)



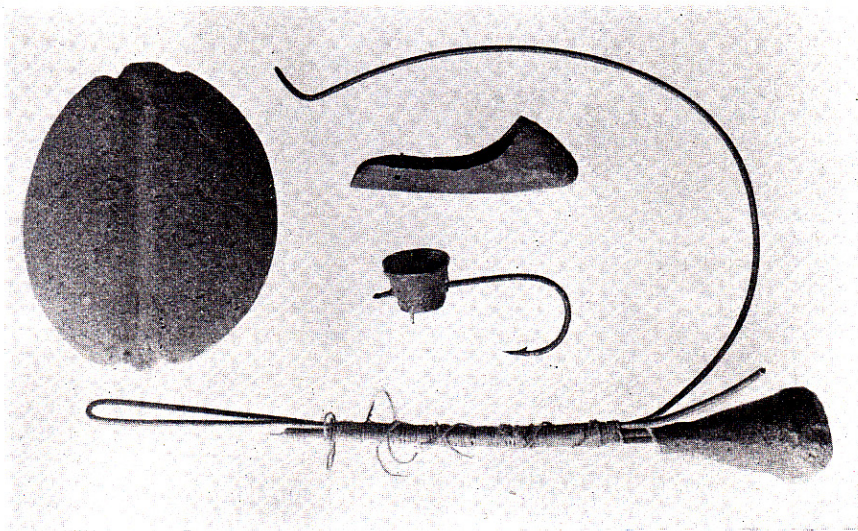
2. トコブシコゾウ (浜諸磯)
イソガネ (金 田)



3. アンドシビン (松輪)



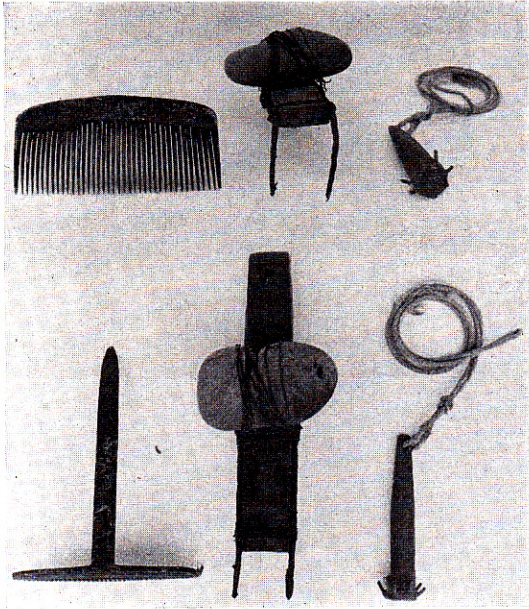
4. コンニャクツリ (松輪)
イカヅノ (松輪)



5. タコイン (松輪), ブリツリ (松輪), タイコナマリ (松輪), ビシ (上宮田)

図版 VII

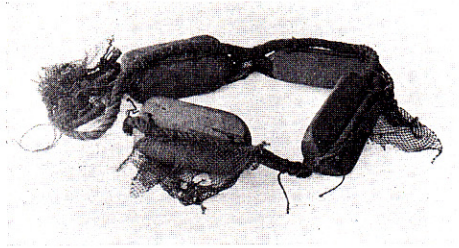
漁具 (3)



1. ブトカキ (金田), タコツリイシ (金田), スバル (金田)



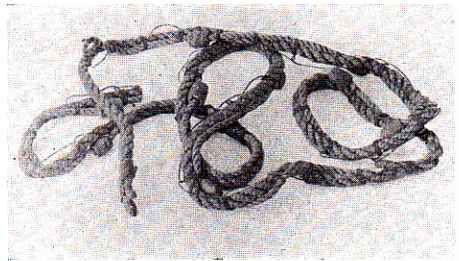
2. タコツボ (神田, 浜諸磯)



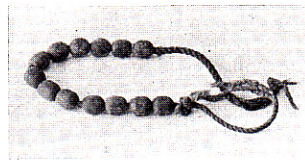
4. アバ (金田)



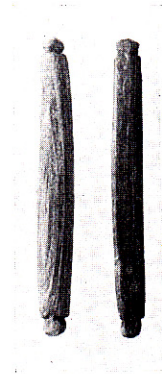
3. ナワバチ (金田)



5. アンナワ (金田)



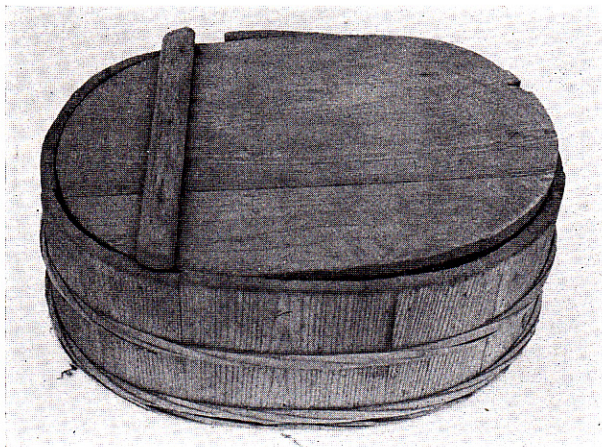
6. ウキ (菊名)



7. アバ (諸磯)

図版 VIII

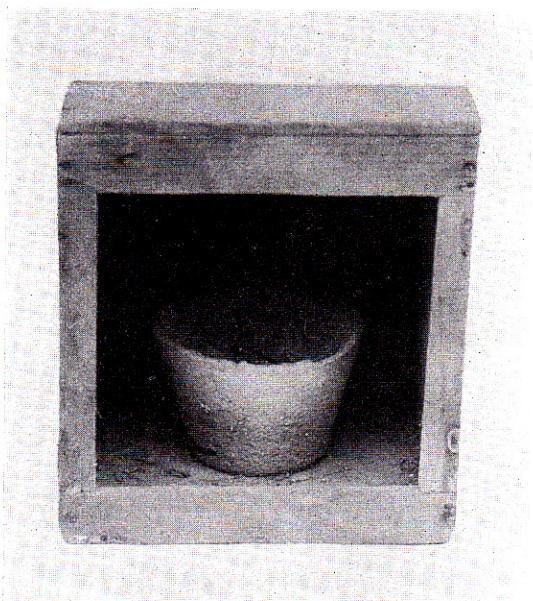
漁具 (4)



1. ヨウバチ (金田)



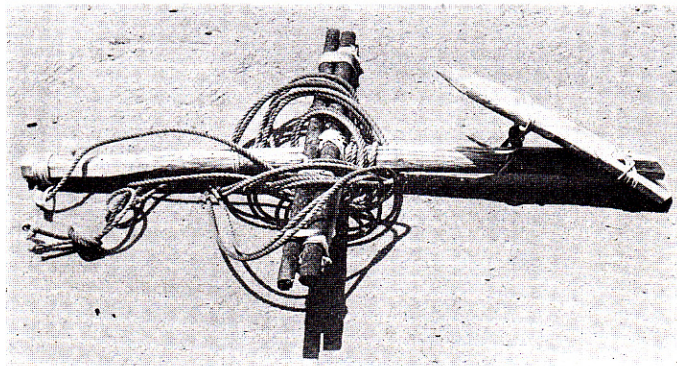
2. アカクミ (上宮田)



3. フナアンカ (金田)



4. カタテ (金田)



5. キイカリ (上宮田)